大塚金之助関係資料解題　　大高俊一郎（一橋大学附属図書館）

1　大塚金之助の略歴と事績

出生から中学時代まで

大塚金之助は、1892（明治 25）年 5 月 15 日、父冨士吉・母とみの長男として、東京府神田に生まれ、1977（昭和 52）年 5 月 9 日に 84 歳で生涯を閉じた。冨士吉は埼玉県の農家に生まれ、母は下級武士の家に生まれた。きょうだいには、冨美（1894 年～1976 年、結婚後徳永冨美）、初（1895 年～1899 年、冨士吉の兄の長女で 1896 年入籍）、冨士夫（1897 年～1940 年）、冨士三（1900 年生、同年死亡）、四郎（1901 年～1910 年）、富雄、健吉、藤江（1912 年～2001 年）がいる。

冨士吉は東京に出て建築の仕事をするようになり、その仕事の都合で一家は転居を重ねた。大塚も転校を繰り返し、中学は神戸の第一神戸中学校を卒業した。中学時代の大塚は植物採集に熱中し、植物学者の牧野富太郎があこがれの人物であった。

神戸高等商業学校時代

大塚は高等学校へ進学し植物学の勉強をする希望を持っていたが、家庭の事情がそれを許さず、神戸高等商業学校を受験する。しかし最初の受験は失敗し、1 年間の勉強をへて 1910 年 4 月同校に入学する（18 歳、その年に迎える満年齢、以下同じ）。入学後も猛勉強を続け、授業料免除の特待生の資格を得た。大塚は坂西由蔵（福田徳三門下の経済学者）のゼミナールに所属し、卒業論文は「『スラヴ』人の原始所有権」であった。

神戸高商入学直後の 1910 年 5 月におこった大逆事件ののち、神戸高商図書館でも社会主義関係の本が閲覧禁止となったが、大塚は無政府主義者エマ・ゴールドマン（1869 年～1940 年）を論じた「主義者『ゴールドマン』」を『神戸高等商業学校学友会報』58 号（1912 年 5 月［著作集 1］[1]）に発表する。ゴールドマンは当時アメリカにあって、大逆事件に対する抗議活動を展開していた。この論文が、国家権力の忌憚にふれ、文部省は校長と図書館長に対して譴責処分を下し、雑誌は回収処分となった。この事件によって大塚は特待生の資格を剥奪される。大逆事件は、その後の大塚の人生に大きな影響を与えた。

東京高等商業学校時代

神戸高商卒業後、1914（大正 3）年 4 月大塚は東京高等商業学校（1920 年東京商科大学、現一橋大学）専攻部に入学する（22 歳）。ゼミナールは坂西由蔵の師である福田徳三のゼミナールに所属し、学費と生活費は家庭教師や翻訳の仕事で稼ぎながら、福田のきびしい指導をうけた。

大塚は、1916（大正 5）年 3 月東京高商を卒業する（24 歳、卒業論文は「村落団体ニ関スル学説ノ研究」［著作集 1］）。同年 4 月に東京高等商業学校講師嘱託となり、主に調査部

の仕事を担当する。この時の仕事で、大塚は全国の主要新聞の切抜と分類を行うが、その体験が、その後大塚が継続的に新聞・雑誌の切抜帖を作成していく契機となった。1917 年 4 月東京高等商業学校講師、同年 11 月東京高等商業学校教授となり（25 歳）、「経済科学」、「経済大意」、「商工政策」の講義を担当する。

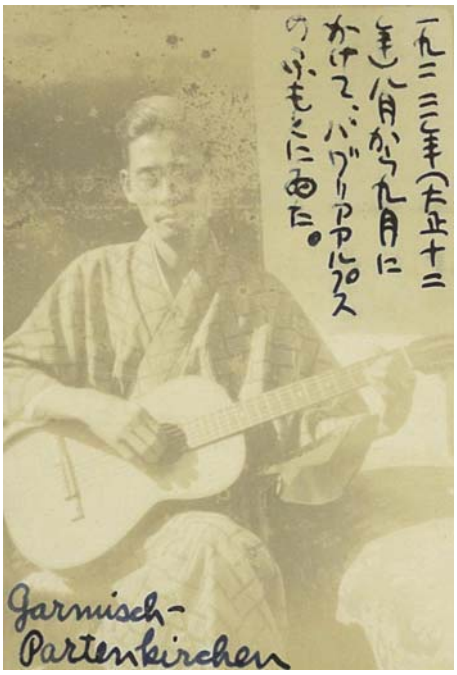
欧米留学時代

1919（大正 8）年 4 月 27 日、大塚は米国留学のために東京を出発し、5 月にニューヨークのコロンビア大学に入学する（27 歳）。アメリカでは統計的経済理論を学ぶかたわら、労働者や警察官のストライキ、黒人差別を見聞し社会問題へと関心を寄せた。

1920 年 1 月大塚はロンドンに渡り、ロンドン大学（London School of Economics and Science）に入学する（28 歳）。ロンドン大学では、シドニー・ウェッブ教授の社会思想史の講義を受講している。

同年 5 月、ドイツに移りベルリン大学に入学する（正式入学は 10 月 31 日）。最初はオーストリア学派の理論経済学の勉強に取り組んだが、のちに研究テーマを社会科学に変更する。当時のドイツは、第一次世界大戦敗北後の政治的・社会的混乱のさなかにあり、民衆の生活は急激なインフレによって窮乏化し、ストライキも頻発していた。このような状況を目の当たりにして大塚はベルリン滞在時代にマルクス主義への関心を高め、1922 年ごろから社会主義関係の文献の収集を開始している。

現在、一橋大学社会科学古典資料センターに収められているメンガー文庫は、当時ベルリンに滞在していた東京商科大学（1920 年 4 月東京高等商業学校が大学に昇格）の留学生が購入手続きを担当し、大塚はその中心的役割をはたした。ベルリン時代の大塚はまた、ローザンヌ学派のレオン・ワルラスとヴィルフレド・パレートの著作を収集し、著作目録も



ドイツ留学時代の大塚
左：1922 年夏、スイスのローザンヌに滞在しレオン・ワルラスとヴィルフレド・パレートの著作を収集していた時の写真（Ot1-I1-65-3）。
上：テニスを楽しむ日本人留学生。後列むかって左端が大塚。（ドイツ、1922～23 年頃、Ot1-I1-65-3）

メンガー文庫の原型（ウィーンのメンガー家、1922 年か、Ot1-C1-9-1）

作成している。これらの文献は、一橋大学の「大塚文庫」に収められている。

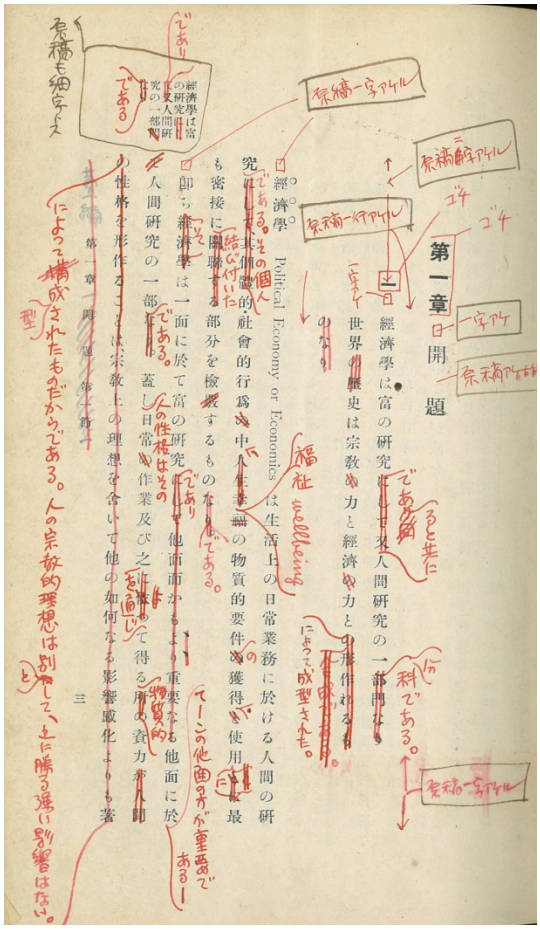
東京商科大学教官時代

1923 年 9 月、大塚は関東大震災の報に接し帰国を決意し、同年 12 月 23 日マルセイユ港から帰国の途についた。帰国後、大塚は 1924（大正 13）年 4 月から東京商科大学で教鞭をとり、「経済通論」「経済学の方法」「経済学史」などの講義を担当した（32 歳）。大塚の講義は学生たちの人気を博した。大塚は、留学前から着手していたアルフレッド・マーシャル『経済学原理』の翻訳を再開し、1925 年から翌年にかけて全 4 巻を改造社から出版した。

帰国後の大塚は本格的にマルクス主義経済学の研究に着手する。睡眠時間を 5 時間に切りつめ、ドイツ語でマルクスの『資本論』と『剰余価値学説史』を読み、『資本論』8 冊、『剰余価値学説史』5 冊になる書抜きノートを作成した。資料番号 Ot1-C3-25（以下、「資料番号」は省略）の資料はその時の書抜きノートであり、大塚の書抜きの方針も記されている。論文もマルクス主義経済学の立場に立った論考を多く発表し［著作集 2、3］、マルクス主義経済学者として名をはせた。1931 年には『日本資本主義発達史講座』（岩波書店、1932 年）の編集に参加する。

この時期の大塚は研究活動だけでなく、マルクス主義の立場から実践活動にも取り組んだ。東京社会科学研究所の設立（1927 年 9 月）、消費組合運動、産児調節運動、ソヴェート友の会、国際労働者救援会、無産者診療所や託児所の運動、唯物論研究会、プロレタリア科学研究所などにかかわった。東京社会科学研究所では所長をつとめ（1930 年 6 月まで）、社会科学関連の文献を収集した（1933 年特高が押収）。さらに、同研究所メンバーを中心として組織された経済批判会を指導し、大塚の監修によってコミンテルン機関紙『インプレコール』に掲載されたオイゲン・ヴァルガによる世界経済に関する報告を翻訳し、『ヴァルガ世界経済年報』として刊行するなどの事業を行った（1928 年～1936 年、全 31 巻）。

1931 年 4 月 1 日、大塚は石川秀子と結婚する（39 歳）。秀子は 1901 年 7 月 4 日、愛媛県宇摩群上分村に生まれた。7 人姉妹の 6 女であった。1920 年 3 月横浜共立女学校卒業、1925 年 3 月神戸女学院音楽部卒業、1925 年 4 月から横浜英和女学校で音楽教師をしていた。


第一章 開題
経濟學は富の研究にして又人間研究の一部門なり
世界文明史は宗教の力と經濟の力とのなり
Political Economy or Economics
經濟學は生活上の日常業務に於ける人間の研究である。其他の社會的行爲の中人生の物質的要件の獲得使用に最も密接に關聯する部分を檢覈するものである。
即ち經濟學は一面に於て富の研究であり他面に於てまた人間研究の一部である。蓋し日常の作業及び之に伴なひて得る所の資力は人間の性格を形作ることは宗教上の理想を含いて他の如何なる影響感化よりも著

マーシャル『経済学原理』大塚自身による改訳作業のあと。ほぼ全てのページで（全 929 頁）この写真同様のきめ細かい改訳が施されている。（佐藤出版部、1919 年、Ot1-E9-2）

治安維持法違反による検挙と獄中生活

1933（昭和 8）年 1 月 10 日、大塚は静岡県田方郡湯ヶ島温泉湯本館に妻と滞在し、『日本資本主義発達史講座』（岩波書店）の「社会思想史」の原稿を執筆しているところを逮捕され、12 日に東京麹町署に護送・留置された（41 歳）。

2 月 13 日、大塚は治安維持法違反（日本共産党への活動資金 1100 円余提供）で起訴され、東京府豊多摩郡野方村（現東京都中野区）の豊多摩刑務所未決監に収監された。獄中の大塚はロシア語や経済学史の勉強に取り組み、出獄後に書物の書抜きを作成した。

3 回の予審尋問をへて、7 月 13 日に第 1 回公判が行われ、7 月 18 日に懲役 2 年執行猶予 3 年の判決が言い渡された。しかし検事局は控訴し、大塚の保釈も認められなかった。大塚は「国体に関する以前の不注意を完全に清算」したこと、「共産主義を完全に清算して転向」したこと、「マルキシズムの論陣から離脱」したことを認めた上申書（Ot1-G1-32-1）を 10 月 21 日付で裁判所に提出した。11 月 2 日、懲役 2 年執行猶予 3 年の控訴審判決が言い渡され、同日釈放された。11 月 8 日この刑が確定し、大塚は東京商大を免官となる。

「強制失業」時代

出獄後の大塚は、一切の公職につくことを禁じられ、敗戦まで失業生活を強いられた。のちに大塚はこの失業時代を、権力によって失業を強いられたという意味で「強制失業」と呼んでいる。要視察人として特高の監視下におかれ、さらに、東京商大附属図書館の利用も禁止された（1937 年条件付きで利用許可がおりる）。大塚は上野の帝国図書館、大原社会問題研究所、当時唯一の公開大学図書館であった慶應大学図書館などに通って勉強をつづけた。トマス・モア死去 400 年を記念して「トーマス・モア（一四七八 - 一五三五）」（『改

造』17 巻 7 号、1935 年 7 月号）を執筆し、これ以後、解放思想史上の重要人物の記念日をとらえて文章を発表していった。また、アダム・スミスやベンジャミン・フランクリンの研究に着手し、書抜きノートを作った（アダム・スミスの読書ノートは Ot1-C3-25、フランクリンの書抜きは Ot1-C8-11）。

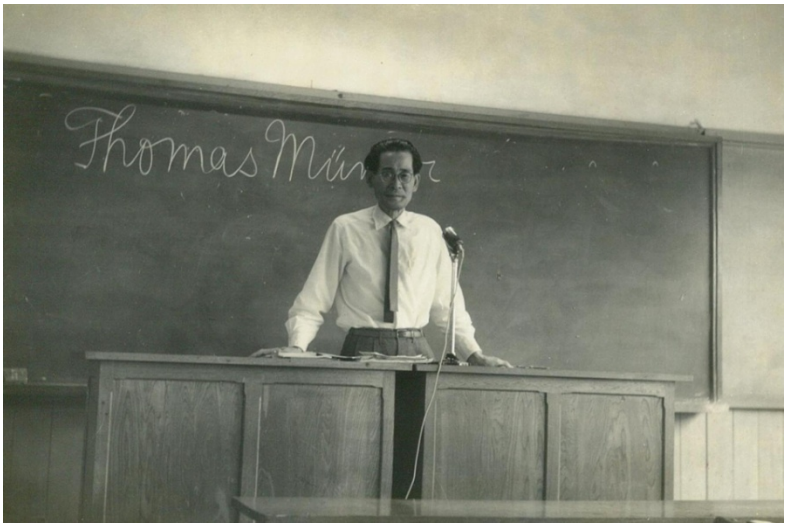
失業中の生活は、妻・秀子のピアノと英語の家庭教師の収入と、大塚が三井物産から依頼された洋書の翻訳と紹介の仕事、友人らの援助で支え、時には蔵書を売り払うなど苦しい生活がつづいた。

1940 年、戦時体制下で自由がますます狭められていくなかで、当局の監視はさらに厳しくなり、マルクス主義はおろか自由主義的な書物の所持も許されなくなる。こうしたなかで、大塚は自らの蔵書を自らの手で焼き捨てた（邦書 1,000 冊、洋書 500 冊）。この時の梵書目録は、戦後大塚自身によって作成されている（Ot1-H4-1-1-26-16）。また、空襲をまぬがれるため蔵書を疎開させたが、その一部（手稿類）は 1945 年 5 月 29 日の横浜空襲で焼失している（疎開目録は Ot2-1-16）。この時消失した手稿類のなかには、社会思想史をテーマとした完成寸前の学位請求論文も含まれていた。

戦後の大学教師生活

1945（昭和 20）年 8 月 15 日の日本の降伏により、大塚はファシズムから解放された（53 歳）。同年 12 月 26 日、大塚は東京産業大学（東京商科大学が 1944 年 10 月に改称、1947 年 3 月再び東京商科大学の名称に戻り、1949 年 5 月に一橋大学となる）教授として復職をはたし、「近代社会経済思想史」や「経済学史」の講義を担当する。1947 年には東京商科大学経済研究所長に就任する。

1956（昭和 31）年 3 月 31 日付をもって、大塚は一橋大学を定年退職し、4 月 1 日付で名誉教授となる（64 歳、1956 年度は講師として一橋大学社会学部で「社会経済思想史」を講義）。同時に 4 月からは慶應義塾大学の講師に就任し、経済学部で講義を担当するようになる。慶應義塾大学での講義は 1973 年度まで続けられた。



トーマス・ミュンツァーについて講義をする大塚（場所は不明、1957 年、Ot2-3-78-1-2）

1957（昭和 32）年 5 月 30 日には、明治学院大学の教授となり、経済学部で「経済思想史」の講義とゼミナールを担当する（65 歳、ゼミナール

は 1960 年から)。明治学院大学の大塚ゼミナールは、ゼミナール機関誌を発行したことが特徴的であった。そのゼミナール誌は、大塚がドイツ留学時代に親しんだベルリンの通りにちなみ『Unter den Linden』(ウンター・デン・リンデン=リンデンの木かげ)と名付けられた。同誌はゼミナール生が編集作業を担当し、1959 年から 1965 年まで毎年 1 号のペースで、7 号まで発行された(同誌は Ot2-1-24)。

研究・学会活動と社会運動への取り組み

1949(昭和 24)年 4 月 10 日、岩波新書青版第 1 号として大塚の『解放思想史の人々――国際ファシズムのもとでの追想 一九三五〜四〇年』が刊行された[著作集 4](57 歳)。この書物は、人類解放、すなわち「人種的・民族的・政治的・警察的・宗教的・性別的・社会的・階級的な圧迫、迫害、無知、偏見および迷信からの解放」(同書「まえがき」より)にかかわりの深い人物をとり上げたもので、戦時下に書かれた文章が基礎となっていた。

このほか、戦後の大塚による編著書には、大塚金之助編『岩波小辞典 社会思想』(岩波書店、1956 年)、経済学史学会編『「資本論」の成立』(岩波書店、1967 年、第三部「『資本論』第一巻の反響」の編集および「はじめに」を杉山忠平と共同で執筆)、大塚金之助『ある社会科学者の遍歴――民主ドイツの旅』(岩波書店、1969 年)などがある。私家版で作成された『INDEX LIBRORUM PROHIBITORUM IN THE PRE-WAR JAPAN』(1959 年)は、戦争中の特高の監視下で、大塚が自らの手で焼き捨てた蔵書の目録である(Ot2-5-5)。大塚はこの目録に、「ファシズムが、いかに文化または進歩を破壊するかの一つの無言の記録」(はしがき)という意味をあたえている。

戦後の大塚は、ふたたびいくつかの社会運動に関係するようになった。なかでも大塚が熱心に取り組んだのは、日本ドイツ民主共和国友好協会の活動であった。同協会は、1954 年に設立された日独文化の会を発展的に解消し、それを引き継ぐ形で 1963 年 6 月 8 日に設立された。大塚は同協会の顧問に就任し、1973 年 5 月 12 日には会長に就任している。

学会活動の面では、大塚は 1950 年に設立された経済学史学会の創立発起人となり、設立後は幹事に就任している。同年にはまた、日本学士院会員にも選出されている。

ヨーロッパ、社会主義国への訪問

戦後の大塚は、精力的にしばしば海外へ出かけた。1956(昭和 31)年には、ローマで開催された国際経済学会に日本経済学会連合代表として夫人とともに出席し(9 月 6〜11 日)、そのままケルンで開催されたドイツ社会政策学会に出席、その後、ヨーロッパ各地を歴訪し 12 月 14 日に帰国している(64 歳)。1959(昭和 34)年には中国科学院からの招待をうけ、11 月 25 日から 12 月 29 日にかけて、夫人とともに中華人民共和国を訪問している(67 歳)。1960(昭和 35)年 11 月 12 日には、東ドイツのフンボルト大学(旧ベルリン大学)創立 150 周年記念祝典に招待され、夫人とともに出席した(68 歳)。1964(昭和 39)年 9 月 6 日には朝鮮民主主義人民共和国の朝鮮対外文化連絡協会および社会科学院の招待をうけ

夫人とともに訪問し、10 月にはその帰途で北京を訪れた（72 歳）。1964 年 11 月から 1965 年 2 月にかけては、オックスフォード大学の招待により、セント・アンソニース・カレッジの極東研究ゼミナールで報告を行い、帰途東ドイツを訪問して 4 月 8 日に帰国した。1966 年 8 月にも東ドイツを訪問し、9 月 19 日フンボルト大学から名誉哲学博士の学位を授与されるとともに、10 月 6 日には国立図書館から名誉終身閲覧者に指名された（74 歳）。1969（昭和 44）年にもベルリンを訪れ、東ドイツ国立図書館東洋部創設 50 年祭に出席している（77 歳）。1975（昭和 50）年 3 月 19 日から 4 月 20 日にかけても東ドイツを訪問し、これが最後の外遊となった（83 歳）。

以上の外遊体験を、大塚は新聞・雑誌への寄稿や自身による講演によって日本国内の人々に伝えていった。なかでもドイツにおける体験（戦前のドイツ留学時代、戦後の東ドイツのもの）は、1969 年 5 月 51 日に刊行された大塚金之助『ある社会科学者の遍歴――民主ドイツの旅』（岩波書店）として 1 冊の書物にまとめられた［著作集 7］。

外遊中の大塚
左：国際経済学会に参加した時の大塚夫妻（ローマ、1956 年、Ot1-I1-48-1-2-2）
上：赤子を抱く大塚（中国、1959 年、Ot3-139-2-2）

歌人・大塚金之助

大塚金之助は、学者としてだけではなく、歌人としても著名であった。ドイツ留学中の 1921 年、大塚は『東京朝日新聞』の朝日歌壇に投稿するようになり、1 月 20 日に遠見一郎（母・とみの長男の意）のペンネームで同欄にはじめて短歌 2 首が採用された。朝日歌壇の選者は、アララギ派の島木赤彦であった。1922 年 5 月 18 日、弟の冨士夫をとおして、大塚はアララギに入会の申込みをする。同年 8 月号の『アララギ』の島木赤彦選歌欄に、遠見一郎のペンネームによって短歌 2 首が掲載され、その後 1927 年まで『アララギ』に短歌を投稿していった。

しかし、帰国後の大塚の学問が近代経済学からマルクス経済学へと旋回していったのと

歩調を合わせるように、歌人としての立場も変化していった。1927 年、大塚は大熊信行（福田徳三門下の経済学者、歌人、当時高岡高等商業学校教授）が主宰する短歌雑誌『香圓（まるめら）』に歌論「無産者短歌」を発表する。このなかで大塚は、「短歌に於ける根本的終局的対立」は、「有産者短歌と無産者短歌との対立」にあるとして、「社会主義的芸術観の立場」「無産階級の立場」に立つことを表明した［著作集 9］。

その後、大塚は研究と実践活動に専念し、しばらくの間歌作が中断する。歌作が再開されるのは、1933（昭和 8）年 1 月の逮捕後、獄中においてであった。大塚は獄中で作った短歌を秘密の方法（著作集 9 に掲載）で外に持ち出し、出獄後の 1934 年から石井光（東京商大大塚ゼミナール出身で東京社会科学研究所事務長、1931 年に死去）のペンネームで『短歌評論』や『短歌研究』に発表していった。出獄後は、権力の監視下におかれた「強制失業」時代の生活や心情、時局情勢などを短歌にしていったが、この時期の短歌は戦中は未発表のままであった。そして、敗戦後の短い期間に作られた短歌を最後に、大塚による作歌は終わりを告げる。大塚の歌集には、『朝あけ』（謄写版刷り、1947 年）と没後に刊行された『人民』（新評論、1979 年）がある。

Ⅱ　資料の説明と整理方法

大塚金之助関係資料の全般的な説明

ここでは、大塚金之助関係資料（以下、本資料）の全般的な解説を行う。生前の大塚は、ヨーロッパと日本の大学に 2 つの「大塚文庫」を遺した。前者は、12,000 冊の和書からなる東ドイツ国立図書館（東ベルリン）所蔵の「大塚文庫」（以下、ドイツ「大塚文庫」）であり、後者は 8,000 冊の洋書からなる一橋大学所蔵の「大塚文庫」（以下、一橋大学「大塚文庫」）である。さらに 2000 年 6 月、明星大学図書館に第 3 の「大塚金之助文庫」が設置された。この文庫に収められた蔵書は、上記 2 つの「大塚文庫」以外の大塚の蔵書約 400 冊（和書が中心）である。

ドイツ大塚文庫（東ドイツ国立図書館、1966 年、Ot1-I1-5-1-5）

本資料は、大塚が遺した全資料のうち、上記の 3 つの文庫以外の全ての資料であり（遺族が所有する写真等の一部資料を除く）、その点数は 30,082 点[2]に及ぶ（非公開資料を含む点数）。本資

料はその伝来によって Ot1 から Ot7 までの 7 つに区分される。Ot1 は一橋大学大塚ゼミナール出身の都築忠七一橋大学名誉教授の研究室（旧大塚金之助研究室）に保管されていたもので、著作集編集のための資料であった。1990 年 2 月、都築の退官にともなって一橋大学附属図書館に移管された。Ot1 は本資料の中で最も点数が多く、本資料の中心をなしている（26,692 点）。Ot2 は大塚秀子夫人没後の 1999 年 4 月に大塚邸に残された資料を整理したもののうち、大塚会事務局預かりとなっていた分を、2004 年 1 月に一橋大学附属図書館に寄贈されたものである（1,545 点）。Ot3 は一橋大学「大塚文庫」の洋書とともに一橋大学附属図書館に寄贈されたもので、一橋大学「大塚文庫」には入らなかった新聞・雑誌類などの資料である（1,671 点）。Ot4 は一橋大学社会科学古典資料センターが保管していたものを、2003 年 3 月に一橋大学附属図書館に移管したものである（151 点）。Ot4 のうち一部の洋書は大塚文庫に移管したが、それらの資料については資料名欄に “[大塚文庫へ移管]” と注記したうえで本資料の目録に残してある。Ot5 は杉原四郎（経済学者、関西大学教授、甲南大学教授）から一橋大学附属図書館に寄贈された大塚の講義関係の資料である（7 点）。Ot6 は大塚宛の極東書店からの配送物で中身はディーツ社版のローザ･ルクセンブルク全集 1～3 巻と納品書であるが、伝来は不明である（8 点）。Ot6 は未開封の状態で保管されていたが、目録をとるにあたって開封した。Ot7 は大塚の遺言関係の資料で、2009 年 2 月に遺族から一橋大学附属図書館に寄贈された（8 点）。

以上の伝来のうち、Ot1 のみ A～K と C’、H’を加えた 13 のグループに分類されている（A～I の分類と内容の表記は都築忠七による）。A は大塚発の書簡類（3,062 点）、B は大塚宛の書簡類（9,341 点）、C は詩、論文原稿、講義ノート（1,698 点）、C’は労作、書込み入り資料、個人的記録（858 点）、D は新聞切抜（1,293 点）、E はパンフレット、雑誌（2,162 点）、F はコピー類（整理の途中で D に編入されたと思われ、現時点では存在しない）、G は著作集関係書類（1,466 点）、H は雑（4,529 点）、H’も雑（945 点）、I は写真（1,214 点）、J は目録カード（122 点）、K は目録カードケース（2 点、ケースのなかに多数の目録カードあり）となっている。ただし、この 13 グループの分類は、目録データベース作成の作業を開始する前のものである。したがって、各グループの内容は必ずしもここであげた内容に限定されるものではなく、かなりおおまかな分類と考えていただきたい（たとえば Ot1-A には書簡類以外にも書類、パンフレット類、メモ、講義関係などが含まれている）。

以上の経緯から明らかなように、本資料は大塚の没後、関係者の手による整理をへたものが大部分である。したがって、本資料全体の秩序は大塚本人の意図を反映するものとはなっていない。

資料整理の方法

本資料は、一橋大学後援会による助成事業として 2007 年度から整理が開始された。2007 年度は主に資料番号の付与とクリーニング作業を行い、2008 年度から目録データベース作成作業を開始した。2010 年 7 月には、一部の外国語資料を除いて目録データベースへの入

力がひとまず完了した。本資料の目録は、請求番号、区分（分類）、作成者、資料名、巻号、作成年月日、数量、著作集の項目で構成されている。それぞれの資料は 1 点ごとに番号を付けたうえで、封筒につめて整理を行った（資料の状態などによっては複数をまとめて封筒づめ）。あるまとまりをもつ資料については、1 点ずつ目録にとり上げず、そのまとまりで 1 点の資料として番号を付けているものもある。

その番号が請求番号である。資料に番号を付けていく順序は、資料の原秩序のとおりとした。請求番号は、伝来-箱番号 - 資料番号 - 枝番号という順序で付けられている。枝番号は必要に応じて、最大で 4 層まで存在する。資料番号とそれ以下の枝番号は階層構造をなしており、上位の番号を同じくする資料は、なんらかのまとまりをもつ資料群であることを意味する。たとえば、Ot1（伝来）- D4（箱番号）- 7（資料番号）という資料は、Ot1 - D4 - 7 - 0 から Ot1 - D4 - 7 - 6 までの 7 つの枝番号で構成されている 1 つのまとまりをもつ資料群である。資料番号や枝番号に「0」とある場合、その資料はそれと階層を同じくする資料全体を束ねていたものであることを意味している。たとえば、Ot1 - D4 - 7 - 0 は、Ot1 - D4 - 7 - 1 から Ot1 - D4 - 7 - 6 までの資料が収納されていた袋である。「0」に該当する資料には、封筒、綴じひも、表紙、ケースなどがある。さらに、Ot1 - D4 - 7 - 1 は Ot1 - D4 - 7 - 1 - 0（封筒）から Ot1 - D4 - 7 - 1 - 20 までの資料で構成されている。つまり、袋（Ot1 - D4 - 7 - 0）のなかに入れられていた資料のなかに、20 点の資料が入った封筒（Ot1 - D4 - 7 - 1 - 0）があったということを意味している。

作成者と資料名は原則として資料の表記にしたがっている。ただし、作成者や資料名が明らかではないが推定可能な場合には、それを“[　]”で補った。また資料名が明らかな場合でも、それだけでは資料の性格を理解することが困難な場合には、目録作成者が“[　]”内に適当な資料名を補った。適切な資料名を確定または推定することが困難な場合には、“「　」”内に資料本文から一部を引用して資料名にかえている。作成者と資料名に限らず、“[　]”は目録作成者による推定・補記、“「　」”は資料からの引用であることを示している。なお、「蒲二郎」、「遠見一郎」、「石井光」（東京商大大塚ゼミナール出身で 1931 年に早世した実在の人物からとったもの）、「展望子」は大塚のペンネームである。

作成年月日も資料の表記にもとづいて記入しているが、本資料の大半は、それとは別にスタンプや手書で日付が記されている。これは目録上には掲載されていないが、大塚がその資料を入手した日付を記したものである。また、メモなどの手稿類には日付スタンプが作成の日付を意味していると考えられるものも多くみられるが、それらについては閲覧者が個別に判断していただくほかないと思われる。なお、日付以外にも、資料の多くは大塚による書き込みがのこされており、大塚の考えを知る貴重な手掛かりになると思われる。

数量欄は、資料の形態にしたがって冊、枚などの分量を記入してある。ただし、資料の分量が多い場合には「一括」と記入してある。また、あるまとまりをもつ資料を 1 点ずつ目録にとらず、それ全体で 1 点としてとり上げている資料も、その数量を「一括」と記入しているケースが多い。

著作集欄は、その資料が著作集に掲載されている場合などに、該当巻数と頁数を記入している。

資料区分ごとの説明

本資料は 10 の大分類と、その下位の小分類に整理されている。その分類が区分である。以下に、【大分類】（小分類）の形で区分を記す。【刊行物】（雑誌、新聞、図書、抜刷り）、【通信物】（絵はがき、書簡、電報、はがき）、【印刷物】（パンフレット類、ビラ、名刺）、【手稿類】（原稿、日記・手帳、ノート、メモ、講義関係）、【書類】（書類）、【切抜】（切抜）、【画像・音声記録】（写真類、テープ）、【収納】（ケース、ひも、表紙、封筒、箱・袋）、【目録】（目録）、【その他】（一括、欠番、雑、未分類）となっている。

ここでは、目録のとり方と整理方法に説明を要する資料区分について説明する。まず図書、雑誌、新聞などの【刊行物】についてである。【刊行物】の資料の場合、資料名は NACSIS Webcat（http://webcat.nii.ac.jp/webcat.html）に準拠し、その表記にしたがった。図書と雑誌の資料名は、“『　』”や“「　」”を用いずに書名・誌名を記入している。また、雑誌や新聞の一部抜粋（抜刷、切抜、コピーなど）は“資料名（出典）”というスタイルで資料名欄に記入してある。

次に【書類】についてである。本資料の目録における【書類】という区分は、きわめて多岐にわたる種類の資料を含むものとなっている。領収証・請求書などの物品売買にかかわる書類、配送物にかかわる書類、大学における学内業務にかかわる書類、裁判関係資料などが含まれる。また、社会運動団体が作成した資料のうち、不特定多数を対象にしたものではなく、特定個人に宛てられたもの（呼びかけ文、声明、協力依頼など）は書類に分類した。さらに、資料の形態が書簡に近いものでも、その内容が業務上の性質をおびているものは書類に分類した。

次に、【画像・音声記録】のうち、写真類（写真、ネガ、コンタクトプリント）の目録のとり方について説明する。写真はその撮影者が明らかな場合のみ、撮影者名を作成者欄に記入した。ネガとコンタクトプリントもこれに準じている。作成年月日も撮影時の日付を記入した。写真の撮影者と撮影日時が判明するのは、写真の裏側などにそれらの情報の書き込みが残されている場合である。写真類の資料名は、撮影場所、風景、人物などの情報を、できるだけ“[　]”のなかに記入するようつとめた。たとえば、“[写真　大塚金之助　ワイマール　ゲーテとシラーの像前]”という資料名ならば、ワイマールにあるゲーテとシラーの像と一緒に撮影した大塚の写真である。また、写真裏面にその写真のタイトルが書き込まれている場合は、資料名欄に“「　」”を使って記入した。

写真、ネガ、コンタクトプリントは、1 枚ずつ目録にとり上げていない場合でも（「一括」で処理）、資料同士の癒着による劣化を防止するために 1 枚ずつ封筒づめを行った。アルバムに収納されていた写真の場合も、写真をアルバムからとり出して 1 枚ずつ封筒づめを行った。その際、それぞれの写真がアルバムのどの位置に収められていたかを示すため、冒

頭のシートに収められていた写真から順に番号を付けた。1 つのシートに複数枚の写真が収められている場合には、左（左右並びの場合）または前面(重ねられている場合)から番号を付けた。写真が収められていないシートにも番号を付けたうえで欠番とした（したがって目録上の番号も封筒も存在しない)。ただし、アルバムに対するこれらの処置は、写真の保存を目的とした措置であるため、写真 1 枚ごとの枝番号は目録には記載していない。また、台紙に写真が糊づけされているアルバムについては、写真同士の癒着を防止するために 1 頁ずつ中性紙をさしはさむ処置を行った。

ネガシートに収納されていたネガについても、ネガとシートが癒着してしまっているものが多く発見されたため、ネガをシートからとり出して 1 枚ずつ封筒につめた。1 つのネガケースは数枚のネガシートを内蔵しているが、手前のシートに収納されていたネガから順に枝番を付して封筒につめ、資料番号を記入した大きめの封筒にケース単位でまとめて収納した。シートが連なっているタイプのケースの場合、ケースとの連結部分に近いシートから番号を付けた。1 枚のシートのなかにネガが複数枚ある場合には（1 枚のネガが切断されているケースなど)、向って左側から番号を付け、重ねて入れられてある場合には手前から番号を付けた。ネガが入っていないシートもあるが、シートに書き込みがある場合にネガと書き込みの対応関係を明らかにするための措置として、空のシートの部分は番号をとばした。たとえば、ネガシート 4 枚を内蔵するネガケースで、手前から 2 枚目のシートにネガが入っていない場合、仮にケースの資料番号を 1 とするとネガの番号は 1‐1、1‐3、1‐4 の順に目録に記載されている。目録のなかで、ネガの部分で資料番号がとんでいるものがあるのは、以上の理由によるものである。

【収納】は封筒、綴じひも、表紙、ケースなどの、複数の資料を束ねているものであり、資料番号「0」のものが多い。

【目録】には、冊子として刊行されている目録以外にも、書店から送付されてきた刊行物カタログも含まれる。ただし、ハガキによる刊行物案内は【通信物】に分類している。

<u>非公開資料について</u>

本資料には、現時点で非公開となっている資料も存在する。当館では、「大塚金之助関係資料取扱要領」（http://www.lib.hit-u.ac.jp/retrieval/bunko/pdf/Ot-terms.pdf）を作成し、これにもとづいて個人情報・プライヴァシー保護の観点から、現時点では非公開としている資料がある。たとえば人事に関する情報が記載されている資料、講義やゼミナールにおける成績にかかわる資料、所得にかかわる資料、名簿などが該当する。これらの資料は、非公開事由にもとづく非公開年限が経過したものから順次公開していく予定である。

また、私信（書簡、ハガキなど）については、著作権者の許諾が得られるまでは暫定的に非公開としている。著作権上の問題のある資料については、著作権者に公開の諾否を確認し、許諾を得られた資料から公開していくことを予定している。現時点で未整理のものには、一部の外国語資料がある。これらはデータ入力がすみ次第公開していく予定である。

なお、データベース上では非公開資料にも番号を付しているので、公開目録上では非公開資料の請求番号は欠落している。

【参考文献】

大塚金之助、1980 年～1981 年、『大塚金之助著作集』全 10 巻、岩波書店[3]
長田五郎、2000 年、「『大塚金之助文庫』の設置」（『如水会会報』844 号）
金沢幾子、1991 年、「大塚文庫について」（『大塚会会報』18 号）
倉田稔、1998 年、『大塚金之助論』、成文社
高島善哉、1980 年、「わが『うちなる人』大塚金之助先生」（『大塚金之助著作集月報 1 第 4 巻』岩波書店）
津田内匠、1980 年、「大塚金之助――切抜き帖台紙が語る」（『図書』370 号、岩波書店）
都築忠七、1978 年、「大塚金之助先生と『解放思想』」（『現代と思想』31 号）
戸塚隆哉、2000 年、「大塚先生の最後の蔵書整理」（『大塚会会報』27 号）
細谷新治、1977 年 12 月、「大塚金之助先生と書物（一）」（『窓』23 号）
――――、1978 年 3 月、「大塚金之助先生と書物（二）」（『窓』24 号）
――――、1978 年 6 月、「大塚金之助先生と書物（三）」（『窓』25 号）
――――、1978 年 10 月、「大塚金之助先生とビブリオグラフィー」（『経済資料研究』13 号）

---

[1] “[著作集 巻数]”は、著作集のその巻数に該当する文章が掲載されていることを示す。
[2] 資料の点数は 2011 年 3 月時点の数値。複数の資料をまとめて 1 点とカウントしているものも多く、今後そのような資料を 1 点ずつ目録にとり上げていく作業が進めば、資料点数はさらに増加することが見込まれる。
[3] 第 10 巻の巻末に、「大塚金之助略年譜」と「大塚金之助著作目録」がある。